

---

# STEP BY STEP!

matiko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

STEP BY STEP!

### 【Nコード】

N5878U

### 【作者名】

matiko

### 【あらすじ】

平凡な女子高生の私、西野奈緒。それなりに毎日を過ごして、それなりに友達とも遊んで、それなりの成績で高校を無事に卒業するのだと思ってた。なのに 異世界？行方不明の聖女の代わり？褒美に王子様との婚約？おまけに遊んで暮らせるだけのお金？「そんなのいららないんで、私を還してください」

## 登場人物紹介

西野 奈緒にしのお（16）

女子高生。授業中に居眠りをしていたはずが、なぜか森の中。行方不明の聖女、サファイアに似ているということで聖女が発見されるまで身代わりをすることに。王に押し切られ、ラズワールドと婚約関係を結ぶ。願いは「もといた世界に還る」

サファイア（？）

行方不明の聖女。聖女の証しである足首の痣と星見の力を持つ。国が16年ぶりに保護した75代目聖女であり、彼女の出身やその他情報は機密とされている。

ラズワールド・ル・ファランドール（16）

ファランドール王国の第一王子。金髪に空色の瞳。国一番の美人と評判な16歳。

聖女の身代わりとなった奈緒へのご褒美その1。奈緒の婚約者。

ジエド・リヤード（22）

王子の教育係。エリート貴族街道を突き進んでおり、次期宰相候補とも噂されている有能な人。

常に胡散臭い笑顔を浮かべている。その胡散臭さとやけどしちやいそつな感じがご婦人に人気らしい。ガーネット、ベリルとは幼馴染。

ガーネット・オルフ（18）

オルフ家長女。ラズワールドのことを幼いころから想い続けている。パツと出でラズワールドの婚約者となった奈緒のことをよく思っ

いない。ジエド、ベリルとは幼馴染。

ベリル・オツフェンバック（22）

貴族のボンボン。赤髪。自由人であり、身分や堅苦しいものを嫌う。

勘当一步手前で、ただ今王都に道楽中。ジエド、ガーネットとは幼馴染。

オニキス・ル・ファランドール（38）

賢君と噂される現ファランドール王国の国王。

奈緒に聖女の身代わりの報酬として、第一王子との婚約、一生遊んで暮らすことのできるような大金を押し付けた。妃を溺愛していて、他の者の目に触れさせないようにしている。

ルベウス・ル・ファランドール（16）

ファランドール王国の第二王子。容貌はラズワルドと似ているらしい。金髪に赤の瞳。

もともと引きこもりがちだったが、存在を知るものは少ない。唯一サファイアには心を許していたらしく、サファイアが行方不明になった後は引きこもりにさらに磨きがかかった。

ヘリオトロープ・ホルスト（25）

第二王子の元教育係。王からの信頼が厚い青年だったが、とある事件により反王家派集団『ブラックストーン』のリーダーであったことが発覚。現在逃亡中。

随時、更新する予定です。

私は至極平凡などこにでもいるような女子高校生だ。胸を張って言える。勉強も運動も必死に取り組めばそこそこできた。友達付き合いも良好。間違っても休み時間や放課後にタバコを吸うような真似はしないし、掴み合いのケンカなんてしたことがない。おそらく先生からすれば扱いやすい、いい生徒なのだろう。「あら、奈緒ちゃんはいいとこへ進学したのね」と入学当初、近所のおばちゃんに言われ、そしてこれからも「西野さんところの御嬢さんはいい子ねーそれに比べてうちの」と一生（はいいいすぎだけど、きつとずーっと）言われ続けるのだと何の疑問もなくそう思っていた。

「うっそ。ここどこよ」

大きい独り言だなあとと思うけど出ちゃったものは仕方がない。そのくらい衝撃だったのだ。

おそらく私の今いる場所は森。ここはきつと森の中だ。そうしか思えないほど、木々が見渡すあたりにある。見上げると木々の隙間から太陽が見えた。私の頭がおかしくなっていなければ、ついさつきまで現国の授業を受けていたはず。昼休みを挟んでの授業なので、私は襲ってくる睡魔になかなか勝てないでいる。たぶん、私は毎週のように寝てしまったのだろう。みんなの前で居眠りしちゃった！なんて羞恥心はとうになくしているので、というより私以外の子も同じようにうとうととしているので気にならない。私が眠っているとすると、この意識のある私は夢の中の私ということになる。

足元に落ちている木の枝を手にとってみると、ざらざらとした質感と土のにおいが夢にしてはリアルだった。私ってこんなに想像力

あつたつけ？

パキッと。小気味いい音がして、その音のした方へと向いた先には数人の誰かがいた。

「聖女様」

ジエドの呆れたような声で夢から意識が戻った。

「私だからいいものを。聖女様は危機感を持たれたほうがいいですよ」

くいつと眼鏡をあげる仕草をし、おまけにため息までつく。ちなみに私はジエドの目はそんなに悪くないということを知っているので、この伊達眼鏡と心の中で悪態をつくことができる。

「眠ってなんかないよ。どうすればこの時間がなくなるのかを考えていたところ」

「今の受け答えを点数にするとすれば0点です。そこは『聖女として、瞑想をしていた』とすべきでしたね」

聖女の瞑想ってなんだ。そんなのここに来てから一度もしたことないんだけど。私の怪訝な様子に気が付いただろう。ジエドはああと説明してくれた。

聖女には特別な力があるらしい。その力は人によって様々で、力の大小も個人差があるそうだ。その力をコントロールしたり、より強い力にするために聖女は瞑想するらしい。具体的に何をするのか聞いたところ、過去の聖女たちは瞑想の仕方も様々だったらしく、ある者は野原の上で風を感じたり、ある者は滝に打たれたり、ある

者は言葉にして祈ったり。

「過去の文献では日がな一日眠っている聖女も存在したそうですよ」

「私、それがいい」

「それがいい、じゃありません。あなたにはきちんと聖女としての教育を受けてもらいます」

「えー」

「聖女になったからにはそういう決まりなのです。……不満があるようなお顔ですね」

「だって。聖女なんて嘘くさいもの、なりたくてなったわけじゃないもん。」

目が覚めると、煌びやかな天窓が見えた。あれ、ヨーロッパとかの聖堂でありそうなあれ。太陽がまぶしい。どうやら私はベッドに寝かされていたらしく、体を起こそうとすると何故か体が重く感じた。着ていた制服ではなく、どうやらシンプルなワンピースに着替えさせられている。誰が、は今のところ考えたくない。

ここは一体どこなんだろう。

私は西野奈緒。うん、大丈夫。記憶はあるはず。たぶんだけど。

「気が付かれたようですね」

コンコンコンとノックが3回した後に入ってきたその人はベッドに上半身を起こしたまんまの私を見て、笑顔を向けた。

「初めまして、聖女様。私、第一王子の側近をしておりますジエドと申します」

ジエドと言ったその人は、なんだろう、実際の目ではみたことないけど燕尾服みたいな服を着ていた。スーツのもっとフォーマルな感じ。すらっとした体の線にとっても似合っている。さらさらしてそうな黒髪は長くもなく、短くもなく。ツリ目気味の琥珀の目はきつい印象だけど、黒縁眼鏡でちょっとだけ柔らかい印象。言うまでもなく、お顔は整っていらっしやる。

「……聖女様？」

ジエドさんに少しの間、見とれてしまっていたけれど何か変な単語を聞いた気がする。私の聞き間違い？ 聞き間違いであってくれ、と願ってジエドさんの顔をじっと見る。

「あなたのことです、聖女様」

他に誰がいるんですか？なんて聞こえてきそうなほど、さも当た



り前のことのようにジエドさんは言った。笑顔のまんまで！

「いやいやいや。私、聖女じゃないです絶対。人違いじゃないですか？」

聖女って。どこの世界に聖女、なんて真顔で言う痛い人があるんだろ。物語読みすぎ。現代日本ではありえない。昔の日本でもありえなかっただろう。それくらい聖女って私たちからかけ離れている存在。ああ、でも聖女って聞いて思い浮かべるイメージはあるなあ。マリア様みたいに心が清らかで、えーっと他には…背中から羽が生えてたり！ 聖女っていうよりは天使に近いイメージだけ。

「いえ、あなたは間違いなく聖女です」

「ありえません。私は普通の女子高生です」

「…女子高生、というものが一体どのようなものであるのかわかりかねますが、間違いなくあなたは我が国の聖女となられたのです」

「聖女じゃないっていつてるのに……」

にここにここ。ジエドさんにこれ以上言っても無駄な気がしてきた。というかこれってまだ夢の中なんだよね？ 私にしては珍しいファンタジーものだなあ。聖女とか出てきちゃったよ。もしかしたら私、そんな願望あったのかな。なんとなく嫌だ。というか女子高生の言葉の意味知らない…いや、もうつつこむまい。ここは私の夢の中。思い通りにいかない感じがもやもやするけど、夢だからしょうがない。こういうものでしょ、夢って。

「聖女様は少々、記憶が混乱していられるようですね。私でよければ簡単に説明させていただきます」

うわ。私のこのわけわかんない状態を、記憶が混乱しているで済まされた。

ぴくっと目の下がひきつった。でもわけわかんないのは事実なの

で、わかんないことは素直にジエドさんに聞いてみようと思う。

「まず、ここはどこなんですか？」

「先ほどから気にはなっていたのですが、聖女様」

「はい、なんですか？」

にこにこした笑顔で何を言われるのかと私は少しびくびくする。

怒られたり、注意されたりするのは苦手。いい子でいたかったから、叱られたことなんてほとんどなかった。

「私に対して、かしこまった表現は使わないでください。あなたは聖女なのですから」

「え、でも……」

私は日本人だもの。年上には敬語を使えっでもう刷り込みのように私の中で当たり前のこととなっている。見たところジエドさんは私より年上だし、タメでは話せないと思ったから敬語を使っていたんだけど、どうやらダメだったらしい。

「聖女はこの国で唯一の存在です。その位は私なんかよりもずっと高位です。わかりましたね？」

「は、はい！ じゃなくて、うん」

ジエドさん、にこにこしてるんだけど、にこにこしすぎていてちよつと、怖い。パツと見、微笑んでいる好青年なんだろうけど。

「ここはどこか、でしたね。ファランドール王国に聞き覚えは？」

何王国？ 横文字、しかも聞きなれてない単語は一回では覚えられない。もちろん聞き覚えはないので首を横に振る。

「そうですね。ではファランドール王国は、現国王オニクス様が治められている国です。北には大きな湖、東から南にかけて山脈が連なっています。西には広大な平野が。豊かな自然に恵まれた土地で、近年では隣国との争いも見られないですね。賢君とされるオニクス様はまだご健勝で、お二人の王子がいます。王や王子については後々、お見えする機会が設けられるでしょう。他、細かいことについては後々説明いたします」

もう私の頭の中はどうなっているんだろう。ものすごいファン

タジーじゃん。架空の国まで作っちゃってるよ。

「うん、ここがフェアランドール国っていうのはわかった。…私、王様とかに会うのやだよ」

「よっぽどのことがない限り難しいでしょうね。でも聖女様。あなたはすでに王子には会っているのですよ？」

王子に会っていたなんて知らない！ えー夢の中とはいえやっぱり王子様っていうのは一度くらい見てみたいよね。でも記憶がないんだけど…夢なのになんてシビア。

どのくらい時間がたったんだろう。天窓から差し込む陽で明るかった部屋が薄暗くなり始めていた。色んなことを聞いた。この国のことやジエドさんのこと。情報量は増えたと思う。でも。こう、言葉だけを覚えていった、知らされた感じ。夢の中なのに変なの。

「私は聖女じゃないよ」

ジエドさんは前のように否定せずに、静かに部屋に明かりをつけ「暗くなりましたね」と一日で見慣れたにこにこ顔でそれ以上は何も言わなかった。

### chapter 3 ・ 夢のようなお話（前書き）

念のため。少し流血表現あるので苦手な方は注意。

### chap 3・夢のようなお話

夢ってこんなに長く続くものなのかなあ。今まで私の見てきた夢はだいたい時間にして2時間くらいのもが多かった。5分くらいのももあった。でも、こんなに 半日以上なんて見たことがない。夢なのに思考がクリアなもの気になるし、ちゃんと五感の感覚がある。

ふと、部屋に置かれていた本棚が目に入った。この部屋にあるのはベッド、ベッドの傍にある木でできた小さな縦型の棚、足元には変わった絵柄の描かれた絨毯、天窓とドアの反対側にある綺麗なガラス張り。そしてこの本棚だ。本棚の高さは私よりも高く、上段は私の手が届かなかった。幅も狭くはないこの部屋の半分を陣取っている。近寄ってみて、一冊の本を手に取りうとして止めた。

「頭痛くなりそう」

棚にあるすべての本が、片手でやっと持つことのできるほどの厚さだった。…ムリだ。我慢じゃないけど、読書は苦手。

暇。とても暇。ジエドさんが出て行ってからすることがほんとないんだよ。なんで携帯がないのよー。

「メモ発見」

発見とか独り言で言ったけど、普通の真っ白なメモ用紙がベッドの傍の棚に置いてあった。近くには羽ペンとインク。私はメモを一枚千切って、自分の腕の内側にすっと走らした。ようはリストカットするみたいに切ったのだ。したことないけど。もちろん今の行為もそれじゃない。確かめたかった。

「お前の血は何色だ、ってね」

元ネタわかんないんだけど何故か知っている台詞を言ってみる。もちろん私の血は赤だ。ですよねー。

紙を走らせた瞬間、ピリっとした熱。そしてその後ジンジンときつつい痛みがきた。腕には一本の線に沿って血が滲んでいる。痛い。痛すぎる。たまに紙で指を切るけど、その比じゃなかった。思わずうずくまる。血がどんでてくる。今更になって指でするんだ。後悔した。

「わたし、ばかだあー……」

後の祭りってやつだろう。後悔してもしようがない！　まずはこの流れてくる血をどうにかしよう！

「ティッシュ、ティッシュー…それか絆創膏　なんでこの部屋にはないの!？」

ベッドのシーツをタオル替わりに使うのは、なんとなくできなかつた。

「ご丁寧にドアに鍵までかかってあって…ジエドさんめ。」

万事休す。深く切りすぎたのか、血は止まらないし。ドアも開かないし。

「夢じゃないし」

涙が不意にもこぼれた。

Chapter 3 . 糖のよじなのお話 (後書き)

短いけどきりがいいのでこのままです！

## chap 4 ・ 痛み在先

翌朝、ジエドさんに貧血で床で倒れているところを発見され、長い長いお説教が始まった。ジエドさんは笑顔なんだけど…むしろ笑顔だから怖かった。淡々と話すジエドさんだったけど、言いわけや「ごめんなさい」「二度としません」以外を言おうものなら許さないうって感じで、私はその二言しか発していなかった。

私のこの現実はまだ一か月くらいだった。カレンダーもないからわかんないけど、日が昇ったり沈んだりでおよそで判断している。羽ペンもメモも一か月前に腕を切った時にこの部屋からなくなった。ジエドさんはどうしても私をこの部屋から出さたくないらしい。部屋に鍵は必ずかける。出入りするのはジエドさんだけ。そのジエドさんはといえば毎日3食、ご飯と飲み物だけは用意してくれる。…お風呂とトイレは部屋にあるので牢屋とかよりはきつと精神的にまだマシ。私のことを聖女ってジエドさんが言っていたのに軟禁状態のこの仕打ち。窓から見える景色や人は私を素通りする。

ここ一か月でわかったこと。私は文字が読めないらしい。部屋にある本棚の本を開いてみたんだけど、一文字も読めなかった。なんかくねくねしてる文字が並んであるだけって感じ。じゃあどうして言葉は通じるのだろう。…深くは考えないことにした。どうやらジエドさんの言葉は映画の吹き替えみたいに日本語に翻訳されているらしい。同じように、私の言葉もジエドさんに通じている。どうせなら文字も読めるように字幕もつけてほしかった。おかげで私は毎



日、文字の読み書きからジエドさんに教わる日々だ。他にも聖女の教養としての歴史や地理の勉強もさせられる。一日何時間勉強しているんだらう。正直、気の休まる時間があまりない。ジエドさんのいない時間が私にとっては至福の時。

「聖女つて、何なんだろ」

ジエドさんの話を聞く限りでは、国の存亡がかかるくらい大きな存在らしい。隣国との戦争に勝つことができたり、干ばつの土地に雨を降らしたり、火山の噴火を抑えたり。聞けば聞くほど超人的だ。言い伝えによると、聖女を亡くした年は大きな飢饉や災害が連続して起こるため、国はやつきになって次の聖女を探すらしい。不思議なことに聖女の亡くなった日は、次の聖女となる子が生まれてくるらしい。国や自分の生活のために、聖女の親は我が子を国へ差し出す。莫大な見返りをもらって。ばかげている。でもそれをおかしいと言えるのは私がこの国の住人ではないからだ。この世界では元の世界でももしかしたら、一人の人の犠牲によって何十億人が救われる道理。

今日はすでにジエドさんの授業は終わった。遠まわしにまったくやる気が見られませんがね、と嫌みを言われた。思い出したらムカムカするので、気晴らしに窓から外の景色を見る。私のこの部屋は高い位置にあるようで、景色を一望できるのだ。外に出られない私の唯一の気休め。この国は今、冬らしい。窓から見える景色はすっかり雪化粧をしている。どうやら傘はないみたいで、メイドさんたちはみなタオルのような布を頭の上に乗せて雪よけにしているようだ。雨の時はどうしてるんだらう。不思議。

家に帰りたい。家族と友達に会いたい。もしかしたらもう会えないのかもしれない。

いつになったら私は夢から目が覚めるのだらう。　　ううん、ホ

ントはわかってる。

いつになったら私は還れるのだろう。

ホントに還れるの？

怖い。何が怖いのか言葉にできないけど、とにかく怖い。この世界に慣れてしまうのが一番怖い。怖いものをあげるときりがない。

生きたい。絶対、こんなわけのわからない世界で、わけのわからないまま年をとって死にたくない。ちゃんと、生きたい。生き延びる。

朝が来て、夜が来る。その繰り返し。

「おはようございます、聖女様」

「ジエドさん、おはよう」

ジエドさんがにこやかに部屋に入り、かちりと部屋に鍵をかける。この瞬間からまた変わらない一日がまた始まるのだ。

軟禁生活上等です。隙をみて、いつか逃げ出してやるんだから。

Chapter 5 ・ 何もいりません。私を還してください。

「我が君がお呼びですので聖女様。行きましようか？」

告げるジエドさんの顔はすがすがしいくらい笑顔だった。

「ジエドさん、そういうことはもっと前もって言ってほしい！心の準備とかあるから！」

何、その今から行きましようって感じ。いつのまにか手なんか繋がれちゃってるし。場合が場合じゃなかったらドキッとしたかもしない。でも今は全然だからね！

「前もってでは伝えていたつもりなんですけど…聖女様と初めてお会いした際に。とはいえ、謁見することに変わりはないのでさくさく行きましようね」

気分は歯医者嫌がって、親に無理やり連れて行かれる子供の気分。昔に経験済み。

そして、さくさくやって来ました謁見室です。うわーこの中に王様いるのかあ、って思ったら扉の前で立ち止まってしまった。ジエドさんはここで繋いでいた手を離し、ノックしたかと思えば私の背中を押すようにしてその部屋に押し入れた。

「ジエドか」

「失礼いたします」

部屋に入った瞬間、誰が王様か確認する前に頭をぐっと押さえつけられ、お辞儀する形になった。誰が？もちろんジエドさんしかない！ ホントに一瞬のことだった。私に対してなんか容赦ない

な！ 授業を真面目に聞かない私へのあてつけかな。だとしたら怖い。どうか考えすぎでありますように。

「面を上げよ」

王様だと思われる声が響く。低いテノールだ。

ジエドさんは私の頭を押さえていた手を離して今度は折りたたんでいた背中を軽く叩いた。そんなことしなくてもわかってるよ。体を起こし、ゆっくりと顔を上げた。やっと私は王様の顔を見ることができなのだ。

「ふむ、お前が聖女か」

距離にしてたぶん学校のプールの端から端くらいあるだろう。それでも王様の声は私のところまではつきりと届いた。

王様は思っていたよりも若かった。染めたんですか、って感じの金髪を肩まで伸ばしていて、精悍な顔つき。私を観察するような目はさながらライオンのようだ。力強さと知性と豪胆。すべてがその瞳にある。

「お前を歓迎しようぞ。余の国に幸福をもたらすことをとく願う」

王様は私が聖女であるって前提で話を進めていく。

「長年、余の国は平穏であった。それがどうだ。近年は飢饉や災害が頻発しており、治安も悪化の一途だ。でもそれも今日限りであるう。お前が聖女である限り、この国はこれから光が射すに違いない」

わかつてはいたけど、聖女ってこんなに期待されるものなのか。

おかしくない？ 見渡しても王様の近くの騎士達も、文官達も当たり前だろうって顔をしている。疑問符を浮かべているのは私だけ。

「しかし。余の国を救うというのに、まったくの報酬もなしとは余がやりきれぬ」

王座の後ろには王座に似た豪華なイスが3つある。2つは空席。

1つのイスには少年が静かに存在を殺すようにして座っていた。どこを見ているのか、目が合わないんですけど！ この少年、たぶん年は私と同じくらいだろう。で、絶対に王子だ！ 王様譲りの金髪に、端正な顔。瞳はなんととってもブルー。女の子の憧れの王子様

がここにいる。

「お前には余の息子を与えようぞ。あとはそうだな、金をやるう」  
謁見室に動揺が走ったのが手に取るようにわかった。私の後ろでもジエドさんが息を呑んでなかった。この人はこういう人ですよねー。

息子って…ここにいて王子じゃないのかな？　なんで何も反応ないの？　じっと王子様を見つめるけどやっぱり目も合わない。人形か！

「なんだ。余に不満があるのか」

ざわつきが気に入らなかつたらしい。王様は眉を顰めて低い声で呟いた。それだけでざわつきはぴたりと止んだ。

「王様」

「一から教育しなおさなければ。ここまで家臣の出来が悪いと余は心許ないわ」

私の声は聞こえていないのか、王様は言葉を続ける。ざわめきはない。

「王子も、お金も何も私はいりません。そんなのいらないんで私を還してください」

還りたい場所がある。

「私は聖女なんかじゃありません。きつと国も救えませぬ」

「なんと！　お前は聖女ではないと申すのか！」

私の話は聞こえていたらしい。しらじらしく驚いたフリをしている。

「はい」

「ふむ。聖女ともあろうものが余を謀るのか」

「はい　いいえ！」

話が変わった方向にいった気がする。どうして私が王様を謀ったとならんのだらう。王様からは怒気が目に見えるようにわかる。表情はそんなに怒ってない感じだけど。

「余は悲しい。お前が聖女でないとすれば、ジエドから聞いておる聖女の印は真ではないということか」

聖女の印。ジエドさんに習った。確か歴代の聖女には痣があるんだよね。痣といってもそれは独特で、形も大きさも一生変わらずに決して消えないらしい。聖女たちはみな同じ形と大きさの痣を持っていたらしい。

もちろん私に本で見たような聖女の印はない。

「確かお前の印は左の胸元であったな」

もう一度言う。私にそんな印はない。ありえない。

「お前は聖女でないと言う。しかしジエドはお前に聖女の印があったと言う。お前が聖女でないならば、余は臣たるジエドを信ずる。

何か言うことはあるか？」

やられた。ジエドさんめ。いや、この場合は王様が私よりもはるかに上手だった。証拠として着ているワンピースを脱いでみようと思っただが、襟に手を置いただけで王様は気が付いたらしい。騎士に目で合図をしたらしく、王様の周りにいた騎士たちが私を拘束した。手を後ろ手にされ、囲まれた。

「さて。お前は聖女か？ それとも聖女ではないとまだ申すか？」

聖女でないと言ったら、私は王様を謀ったとされるんだろう。王様に嘘をついたってだけでこの扱い。この扱いで済んでいるのは私がかろうじてまだ聖女だと思ってくれているからだろう。でも聖女ではないと私が言ってしまったらそれは二重の罪になる。王様に嘘をついた。加えて私は聖女ではない存在。

覚悟はとっくに決まっていた。

chap 5 ・ 何もいりません。私を選んでください。(後書き)

20日 誤字修正しました。

私の人生ってなんだろうって考えた時に、当然だけど答えなんてでなかった。だって、生きてきた時間よりも先の方が長いんだからでももしかしたらおばあちゃんやおじいちゃんに聞いても答えてはくれなかったかもしれない。

じゃあ生きるってなんだろう。呼吸をしていれば生きていると言えるのかもしれないし、毎日何かに追われていても生きていると言えるかもしれない。世の中にある名言はどれも納得できるものだし、答えや考えはいくつもある。

人生はいくつもの選択の上に成り立っているものらしい。

「さて。お前は聖女か？ それとも聖女ではないとまだ申すか？」  
大きな選択だと感じた。ここに来るまでには当たり前だった今日の朝ごはんはパンかご飯かどっちにしようとか、服は何を着ようとかそういうものではない。もちろんそういう選択の積み重ねが今を作っているのかもしれないけど、これはこれからのことに大きく影響すると思う。

自殺をする人をなんて馬鹿なんだろう、と思っていた。飛び降りたりして死ぬ勇気があるんなら、なんでもできるだろうから生きればいいのに、と。私は確かにそう思っていた。死はとても怖いものであり、私にはまだ訪れないだろうとも。生きるということは尊いもので、私は命がこの世の中で一番大事なものだと思っていた。命があっただけよかったね、とか命あってこそとか聞き慣れたフレーズをそうだねと思うくらいには受け入れていた。



たまに映画とかで死を選んだり、自分が犠牲になるなんて言ってる人を見るとイライラした。なんで生きないの!? あなたが良くても、残された人は傷つくんだよと思った。それは好きなキャラだったり、死んでほしくない人に限って舞台から消えていったせいもあるかもしれない。街中で「死ねば」とか「死にそう」とか軽そうに言う人が嫌いだった。死が身近に感じられるようになったからなのか、周りは生と死の話題で溢れていた。医療技術が進化し、少子高齢社会となり、死は身近でありながら決して避けられないようなものではなくなったからなのかもしれない。

「王様。私は聖女じゃありません」

生き延びる。そう思っていた私のこの選択は間違いかな。ちょっと考えた。もう聖女で通してしまおうかな、って。身分や生活は一応保障されるっぽいし、生きたいならばそれがたぶん正解だった。軟禁状態でも、チャンスはきつとある。いつか逃げ出せばよかった。それで山奥で、ひっそりとした村にかくまってもらってひっそりと暮らそう。日本にいた時ほどじゃないけど、最低レベルの幸せは手に入ると思う。

「…ほう。聖女ではないと申したか」

「はい」

謁見室の空気が張りつめたものとなる。音一つしない。

私は確かに生きたかった。でもそれは自分を殺してまでではない。聖女として閉じ込められて、年を取って。死ぬ瞬間、私に何が残るんだろう。それを考えた時に答えは決まった。私は私。生きるも死ぬも私が選択したい。生きるのなら「私」として。死ぬのも「私」として。じゃなきゃ生きていく意味がない。操り人形に何の価値があるだろう。スピアのきく身代わりの人生にどれほどの価値があるだろう。いつの瞬間も心は「私」でいたい。私の名前は聖女様なんてものじゃない。西野奈緒だ。

死は怖い。でも人間いつかは死ぬのだ。手に入れたものはいつか

手離さなければならぬ。いつかがわからないからこそ人生はおもしろいだけども、期限があるからこそ人は精一杯生きる。その期限が今日だったと思えばいいだけ。交通事故で亡くなった人は、今日自分が事故に遭うことを知らずにその瞬間まで生きるのだ。悲しいけれどそれだけ。惜しい人を亡くしたなあ、と言うその人もまた自分の人生を生きる。時間が止まってしまった人は社会から置き去りにされる。それも仕方がないのだ。私は今までいくらの人を置き去りにしたのだろう。今度は私の番。それだけ。この世界にきた時から決まっていたことなのだろう。唯一、恨むとすれば私をこの世界に連れてきた誰かだろう。許すまじ。

「なんとということよ。聖女でもないものが余に刃向い、戯言まで申すとは」

刃向いとは言い過ぎだと思ったが、口を挟める雰囲気ではなかったので黙っておく。

「牢に繋ぎおけ。処分は明朝言い渡す。余と顔を合わせるのも最後であろう。何か言いたいことはないか？」

わかってたけど！ 私、死ぬのかな。震えはしない。まだ実感が無いのかもしれない。

「いいえ。特にありません」

「殊勝なことだ。それだけに惜しいものよ」

王様は目を細めてそう言った。言われた私としては、なら殺すなよとしか思わない。

「余の臣たちよ。今日のご苦労だった。持ち場に帰ってよいぞ。あ

あ、ジエドは残れ」

「かしこまりました」

ジエドさんは恭しく返事をし、他の家来さんたちはみな謁見室から出て行く。

残ったのは私、王様、王子様、ジエドさん。

「さて、ラズワルド。何かこの者について思うことはあるか？」  
王様は王子様の方を振り向き言った。ラズワルドって名前かあ。  
へえー。

相変わらず、整った顔しているなあと感心する。ジエドさんも美形なんだけど、なんか胡散臭そうなんだよね。一癖あります、っていう感じを隠しきれしていない好青年って雰囲気。もしかしたら、隠す気はないのかな。

スカイブルーの瞳が初めて私を見た。目が合った。

「父上。これを僕にください」

王子様の目は本気だった。ちょっと待って、王子様。今まで何を聞いていたの！

chap 7 . 王子様と聖女様

今、まさしく目の前に運命の星がいた。文字通り、私の運命を分けるもの。未来の良し悪しすべての出来事を私はこの人に委ねるよ  
うなものだ。神様でもこんな行いきつとしない。一人の人生をど  
うにかしようなんて悪趣味極まりないのだから。

「父上。これを僕にください」

ぶちつと。私の中で何かがぎれる音がした。

「ねえ、王子様は今まで何聞いてたの？ 私が考えて考えて出した  
答えを白紙にしないでよ！ 第一これってなんだ。私のこと！？  
人のことなんだと思ってるの。ありえない。はいどうぞ、って差し  
出すわけにはいかないに決まってるでしょうが。もう何これ。いや  
だ」

なんて。言えるわけもなく。

私はあまりの出来事に、とうるか出来事の展開の速さについて行  
けずにいた。王子様と王様はわずかに言葉を交わしただけで、もう  
私は王子様のものになっていた。あれ、最初に王様が言ってた「余  
の息子を与えよう」ってのと違うくない？ いつの間にか立場が逆  
転してる。

ジエドさんは言わずもがな。にこにこ黙って話を聞いているだけ  
だった。役に立たない！

「ねえ」

今、なんと私は王子様と二人つきりです。王様は上機嫌で私たち

に用はないと言った。その後何故か王子様に手を引かれて……王子様のお部屋にいる。

男の人の部屋に入るのは緊張した。一瞬だけやばいかもって思ったけど王子様は部屋に着いた途端私の手をぱつと離し、軽く息をついてソファーにもたれた。

「ねえ、王子様」

私の存在を完璧忘れていた王子様。いたのか、とでも言うように私の方を見た。

「ああ、いたのか」

「思っても口に出さないください。第一！ あなたが連れてきたんでしょ」

「…そうだったな。すまない」

全然すまなくなさそうにそう言う。

王子様の部屋はさすが王子様、というような見るからに高そうなものが置いてあった。絵画とか花を生けてる花瓶とか。部屋全体は謁見室のような煌びやかさはないんだけど、落ち着いていて品のいい感じ。ふーん。意外とセンスいいんだ。

「君は本当に聖女なのか？」

出た。聖女。そんなのいるわけないんだって。小学生でも知ってるよ。またかっていうのが顔に出たんだと思う。

「どうかしたのか？」

「ううん、なんでもありません。私が聖女って言うのは何かの間違いであって、私は普通の一般人です」

王子様は少し考えた後口を開いた。…この国にはイケメンしかないんだろうか。ジエドさんと王子様と王様を見ての感想に過ぎないけども、そんな馬鹿なことを考えてしまっ。

「そうか。父はどうしても聖女という存在を作りたいようだな」

「え？」

聖女を作る？ そんな言葉が聞えてきた気がする。ううん、気がするじゃないかって確かに聞こえた。作る、っていう言葉に何故か嫌悪

感。

「君は聖女ではないのかもしれない。だが、父が聖女と言ったのなら君が応にも聖女にならざるを得ない」

まっすぐ私の目を見て王子様がそう言った。空色の瞳が憂いを帯びて、綺麗なんだけど悲しい感じがした。

あ、さっき謁見室で交わしていた言葉は「聖女のことは任せる」みたいな感じだったのかな。王様強引すぎでしょ。あれだけ私が否定したのにゼロになってる。むしろ個人的には状況はマイナス。笑えない。

「君はこれから聖女としてこの国に保護されるだろう」

「保護……」

「ああ。基本は城での暮らしになるだろう」

だろう、だろうって曖昧。顔にはあまり出てないけど、王子様もちょっとは困ってるのかななんて。よく考えれば王子様もとんだとばっちりだよ。何を思って「これを僕にください」って考えになったのかわかんないけど。

「王子様、どうしてあの時あんなこと言ったの？」

これ呼ばわりされたことや私の意志を無視されたことで忘れていたけど、王子様はどうしてあの場面であんなことを言ったんだろう。謁見室では一度も目も合わせなかった人だったのに。

王子様はちらっと横目で私を見て、ふいと顔を逸らした。

「内緒だ」

その言い方がらしくなくなっってちょっと笑った。

「ねえ、王子様。お互い、王子様とか君とか止めない？」

「君の名を僕は知らない」

「私、王子様の名前を忘れちゃった」

手を王子様に差し出した。王子様は私の差し出した手を眺める。

「ラズワルド・ル・ファランドールだ。ラズワルドでいい」

「西野 奈緒。奈緒でいいよ」

ラズワルドは目を細めて私の手を取った。

冬の寒さが嘘のようにその手は温かかった。

王子様のものとなって。なんとか毎日を過ごしている。相変わらずジエドさんに管理されているけども、ラズワルドが進言してくれたのか軟禁生活はちよつとマシになり、自分の部屋とお城の中を見て回るくらいなら許された。その時はジエドさんかお城の兵士さんが付いてきてくれるらしい。

「城で聖女様が迷子にならないように、聖女様が危険な目に遭われないようにするためです。必ず私か聖女様の部屋の扉の前の兵士にお声をかけてください」

ジエドさんの言うことは本当なんだと思うんだけど、それだけじゃないよね。私が逃げ出さないかの監視でもあるのだ。私が逃げ出さないという信頼を私達は築けていない。もつとも。聖女という時点で万が一のことがあつたら大変だから、こんな風に監視の目を厳しくしていると思う。

ちなみにジエドさんと呼ぶには今私の右手にある琥珀色の小さな石が必要になるそう。どこにでもあるような石に見えるけど、なんとジエドさん専用の石らしい。茶色とオレンジ色が混ざつたような色。この石を持ってジエドさんの名を呼ぶと、ジエドさんは私と連絡が取れるらしい。ジエドさん曰く、頭の中に声が直接流れるそう。おまけにおおまかな位置まで知らせてくれるらしい。なんてハイスペックな石。

「珍しいものでもありませんよ。この国の人々は皆、自分の名玉を持っていてるのです。自分と合う石に名を付けて相手に贈るだけです」



「自分の石ってどうやって見つけるの？ 私にもあるの？」

「石とは自然と出会います。導きとでもいうのでしょうか。聖女様ですか…歴代の聖女が名玉を持っていたということは存じませんね」「残念。私も石を持ってみたかったのになぁー」

「って歴代の聖女が石を持ってなかったのって、私の想像でしかないけどお城から出られなかったからじゃないかな。お城の中は綺麗に掃除されているし、聖女がお城の中を自由に歩いていたかも怪しい。石なんて持てっこないよね。ひどい。」

「自分だけのオリジナル、という制限を付けなければ案外見つかるかもしれませんよ」

「え、あるの!？」

「ええ。聖女様、手を出してもらえますか？」

ジエドさんが私のための石をくれるとは思えないんだけど、言われたので不思議に思いつつも両手をジエドさんの前に出す。期待半分、ジエドさん怖いが半分。

「はい、どうぞ」

私の手に乗せられたのは小さな、小さな石。直径は1cmくらい。色は綺麗な琥珀色。ジエドさんの瞳の色と一緒にだ。

「お返しします」

不吉な予感がする。これはもしかしてもしかしなくとも。

「私の石を受け取らないとは大した度胸ですね」

「ほーらやっぱり！ ジエドさんのですよねー。そうですよねー。」

ジエドさんは聖女の私に敬語を使ってくれてるけど、明らか私を敬ってない。

日本人お得意の愛想笑いをしつつ、手は嫌ですとばかりにジエドさんの石をジエドさんの手に付き返す。ジエドさんは私の抵抗をものともせず、笑顔で石を押ししてくる。大人げない！

受け取れ。受け取りません。受け取れ。受けと、りません！受け取れ。

「…ありがたく、頂戴します」

負けた。諦めが早いとか言わないでね！

私の手の中の石はジエドさんとの通信手段だ。良く言えば。悪く言えば手枷だ。私が逃げないように。

昨日、ジエドさんにお城の中を見学してもいいと言われた。昨日、ジエドさんにこの石を渡された。

「ジエドさんと呼ぶってのはなしの方向で！」  
誰もいない部屋に私の声が響く。

だってジエドさんだよ！？ 毎日嫌でも顔を合わせるのに、なんで好き好んでこっちから「来てくださーい！」なんて言わなきゃならないの。わかってはいるけど、どんだけジエドさん苦手なの私。色々こつちやになつて、ジエドさんはなしの方向へ。

そうと決まればお部屋の外にいる兵士さんに頼むまでだ。ええつと。まずなんて言おう。とりあえず名前言って、兵士さんの名前聞いて、護衛してくださいってお願いする。うん、完璧。聖女である私の頼みを兵士さんは断つたりしないだろう。聖女じゃないって声を大にして言いたいのにその肩書きに頼らないと生きていけない自分。矛盾してる。

意を決して扉を開ける。少しわくわくする。訂正。すっごいわくわくする。なんだかんだ言って、ゆっくりお城を見て回るのは初めてだもん。兵士さん、良い人だったらいいなあ。

「聖女様、どちらへ行かれるんです」

扉を開けた瞬間、聞こえてきた声に思わず扉を閉めてしまった。あの間違いようのない声は一人しかいない。

わあああん、幻聴が聞えた！ いやむしろ幻聴であってほしい！ 心臓がばくばく言ってる。怖い。ジエドさんが怖い！

というか私なんでこんなにジエドさんが苦手なんだろ。ジエドさんはきつとDSだから私みたいによわっちい奴を虐めたがるんだ！で、私はさらにジエドさんが苦手になって…ああ、悪循環。ホントのところ、私はジエドさんが嫌いなのだろうか。わかんないや。

「な、なんているの？」

「一つだけ言えることは。」

私はジエドさんの嘘くさい笑顔が苦手ということ。ジエドさん自身はそんなに嫌いではないらしいということ。

前者はともかく。後者は自分でもびっくりだ。

「聖女様が私の名を呼んだので」

「え、呼んでないよ？」

「『ジエドさんと呼ぶつてのはなしの方向で！』」

さーっと青ざめる。そんな私をジエドさんはにこにこ見つめる。

「名玉を握りしめたままそんなことを言っただだ漏れですよ、聖女様」

どうやら、ジエドさんがお城見学に連れて行ってくれるようです。

「名玉、お返しします」

「他人から物を受け取らない主義なんです」

「どんな主義ですか。第一これは元はジエドさんのものです」

「私のものをどうしようが勝手ですよね？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5878u/>

---

STEP BY STEP!

2011年12月9日02時47分発行